



写真13 1945(昭和20)年 鶴見工場に動員された
相模原女子挺身隊

昭和16年12月8日、日本はついに太平洋戦争に突入した。日本はルール違反で真珠湾攻撃を行ったのです。

私は、当時東京日本橋区に住み、高等科1年、13歳でした。学校で朝礼の時、校長先生からお話があり、国民は単純に日本は勝った勝ったと喜び、旗行列^(注1)で神社へお参りに行っていました。開戦当初は日本の勝利が続き国内は沸いていましたが、国民の生活は大変でした。

17年になると衣料・米・砂糖・味噌・塩・油など何でも配給制になり、学校では出征兵士^(注2)の家に5、6人ずつ割りや、芋ほりの手伝いに行きました。毎日のように出征して行く兵隊さんを、村を挙げて祝って旗行列で歌を歌って送り出しました。私は兵隊さんの勇姿に憧れ、自分は女だから兵隊になれないけど、看護婦になれば戦地にいけると思いました。戦争の怖さも知らず、ただただ純心にそう思ったのです。

昭和18年卒業して東京の病院に勤めて昼は見習いで働き午後は看護婦学校に通いました。思ったより厳しくて食べ盛りでいつもお腹はすいていました。一生懸命勉強して試験に合格。

昭和20年になると東京は空襲が続き、田舎へ帰る事になり、電車もなく東京駅まで歩く途中、白木屋デパートが燃えていた。道端にはごろごろ人が死んでいました。やっと乗った列車も満員でひどいものです。地元の病院に勤めたが院長が亡くなり中島飛行機^(注2)の診療所となり、予科練の兵士が負傷して来て、てんでこまいで看護しまし

た。医療薬も包帯、麻酔薬もだんだんなくなり、毎日のように若い兵士が亡くなっていきました。最初は悲しみましたが、毎日の事でだんだん事務的になって手当てしてました。戦争はこのように人を変えてしまうのです。

8月15日正午、天皇の敗戦の言葉をラジオで聞き、兵隊も自分達も信じられず、ほしがりません勝つまでは、一億一億の玉だと教え込まれて頑張ってきたのに、悔しくて悔しくて泣きました。本当に娘時代を悲しい体験で過ごしました。戦争は勝っても負けても国民を不幸にし、国土を破壊するだけです。

得する者はいないのだと気づいて下さい。

それだけを皆さんに訴えて、私の話を終わります。

(注1) 旗行列……多くの人が手に小旗を持って町などを行列して練り歩くこと。投票を表するときなどに行なう。当時は戦勝への祝いで行なっている。

(注2) 中島飛行機……戦前・戦中の日本を代表する軍用機メーカー。一式戦闘機「隼」や四式戦闘機「疾風」など多くの軍用機を開発した。現在の富士重工の前身。

銃後の女性の戦争体験

安藤 喜久江

昭和12年、私が小学校6年生の時、日本と支那事変が始まった年です。8人兄弟の長女として生まれ、米屋の喜久江ちゃんと当時可愛がられ、友達も多く楽しい年頃でしたが、支那事変が始まると共に、生活が一変し、父は42歳で召集され、母と老婆、私と妹3人、弟の5人でした。いくら米屋でも、皆軍隊や国に米を持っていかれ、母と2人で父の実家である下泉に重い荷物を背負い、毎日毎日学校から帰ってくると食糧の買出しでした。

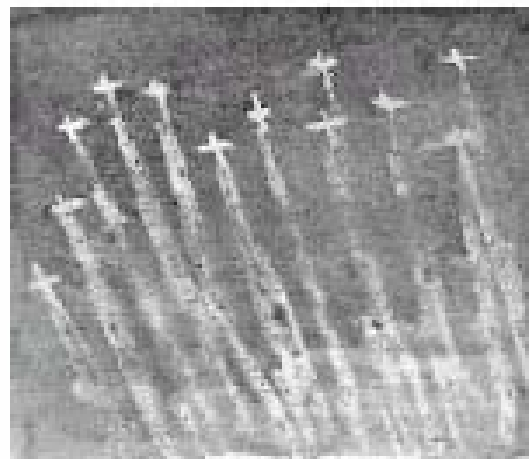
おまえはお姉ちゃんだからと言われ、女学校を卒業した後に日本バルカーパッキン工場の事務員となり、会社内で大変な仕事を友達と連日行っていたある日、敵艦載機の機銃掃射により、友人6人が死亡しました。

私は大変なショックを受け、そうこうしている時に終戦を迎えました。

終戦と同時に私は、相模原の第3陸軍病院の事務本部に勤務をしました。まだ当時医者も皆軍服姿での出勤でした。現在の国立相模原病院です。電車は買出しの人でいっぱいでした。死にもの狂いでやっと家路につき、父の留守宅を母と2人で守ってきました。

二度と戦争はいやです。幸せな事に、父も無事で帰ることができ、母と一緒に明るい家庭になりました。

現在76歳ですが、寿命のある限り全世界の平和を願い、つたない文章ですが、皆様の胸にとどめてくだされば幸いです。



私は昭和17年4月、軍需工場(ぐんじゆこうじやう)に入社し、3年間は教育と機械、組み立ての実技で教育実技を受け、周りになれた頃、急に軍事教練(ぐんじ)の導入となり陸軍軍人が配属され、教育と教練の繰り返しが続く。

その1、銃をかつぎ防毒マスクを着用し2,000メートルの行進です。苦しくてマスクを開け、外の空気を吸うと硝子(びやうす)が曇り、すぐにバレてしまい罵声(ののし)を浴びる。教育の時間は何かに救われ、教師の顔が仏様に見えた。今日は朝から3人1組で土の運搬(うんぱん)の日でした。昼頃、空襲警報(くうしゆうけいほう)が鳴ると同時に、アメリカの中型爆撃機が低空で飛来し、米空軍の星マークが鮮明に見え、まさかと思っていたが本当の米軍機が攻撃して来たのである。その驚きと恐ろしさと、悲惨な状態が続いていました。

会社には女子挺身隊(じよしていしんたい)の人遣、学徒動員(がくともどういん)の学生の食事は粗悪(そあく)になるばかりです。ご飯は大根の葉を乾燥し細く切った物に少しの米を入れ、まるで大根の葉を食べているのと同じでした。副食は、コンブの細切りにホッケの煮付けも塩味でした。このような食べ物が主食でした。毎日の空襲は日増しに激しく、夜中の空襲にはもう死んでもいいから眠くておきる気持ちなどなく眠り続けた。

壱朝グランドに焼夷弾(しょういだん)の不発が4発もめり込んでいた。空中で飛散する弾がそのままグランドにめり込んでいた。独身寮と校舎の全焼を狙った攻撃で町全体は焼かれた。攻撃の後すぐにバラック建ての小屋が出来上がっており、隣組(りんぐみ)の協力だったと思う。

少年の面影(おもかげ)をもった特攻隊員(とくこうたいいん)が、連日出撃の様子を伝えていた。食糧もなく、着る物・石鹸等の日用品はすべてなくなっていた。眠りの中で見る夢は菓子を食べる夢である。シラミがどんなことをしても増え続ける。

毎日の空襲(くうしゆう)にすべての建物は破壊されつくされた。兵隊達は松根油(しょうねんあぶら)を採集し飛行機の燃料にしたという。バスは木材を燃やして走っていたが、坂に来ると人は半分降りて後ろを押して坂を上っていった。

横須賀基地の攻撃は凄まじく、敵の艦載機(かんざいけい)と我が方の対空砲火(たいくうぱうか)の応戦は、最後の戦いの様に記憶する。

20年8月、原爆により終戦を迎えた。静かな夜、始まる日本の夜明け。平和な世の中を、私は祈る。

(注1) 軍事教練……1925(大正14)年より中等程度以上の男子学校に陸軍現役将校を配属して行なった軍事に関する訓練。1945(昭和20)年廃止。

(注2) 学徒動員……太平洋戦争下における労働力不足のために学生・生徒に対して強制された勤労動員。

(注3) 隣組……第二次大戦下、国民総制のために作られた地域組織。町内会・部落会の下に勤軒を1単位として作られ、食糧その他の生活必需品の配給などを行なった。1940(昭和15)年制度化、1947(昭和22)年廃止。

貧しく辛かった少年時代

關 久司

1941年12月8日、第二次世界大戦がはじまりました。相手国はアメリカ・イギリスの連合軍^(注1)です。ヨーロッパではドイツ・イタリアが日本の味方です。

開戦から1年は、南方の島々を占領して勝って、大いに国民は沸きました。

それもつかの間の事で、島づたいに連合軍は攻めて来ました。

当時私は川崎に住んでおり、中学1年が終わる頃になると戦いは一層激しく、負け戦になり、兵士は戦死者が多く、工場では人手不足となり兵器が造れない。勉強はいいから工場で働く事になりました。

その頃から夜になると敵機が飛んで来ては爆弾を投下し、恐ろしい夜が続きました。家に帰っても食べるものはなく、着る物はボロで皆が生きる希望をなくしていました。

敵は日本を爆撃するために大きな飛行機を製造し、10トンも爆弾を積めるB29で、連日のごとく大都市の空襲が始まった。

夜中は夕焼けのように真っ赤に染まり、逃げさまよっている人を想うと胸が痛みました。いつまで負け戦^(負け)を続けているのだろうと、皆が思っていました。

日本国土は全滅になり、ガソリンはなくなり、馬車で荷物を運ぶありさまです。食糧の配給もない日が多く、戦争どころではありません。

連合軍は日本が降参しないので、最後の手段とし広島・長崎に原爆を投下し、一度に何十万の人々が死にました。

1945年8月15日に日本は連合軍に降伏^(ひた)しました。

米軍がおおきなトラックに乗って上陸した。陽気な兵隊に皆が安心した。子供はハロー、ハローと言って投げるガムやチョコを拾った。

食糧不足は何年も続きました。

私も老人になり、平和が一番です。

皆さんも幸せな人生でありますように。



(注1) 連合軍……連合国軍のこと。第二次世界大戦において、日本・ドイツ・イタリアの協同関係に対して反ファシズムで連合して戦った国々のこと。

激動の時代を体験し平和を願う

安達 ハル

今年で終戦後58年経ちましたが、今思えば一番勉強したい時に、一国の誤った指導者に引きずり回された愚かな日々を思うと、怒りでいっぱいです。

忘れようとしても忘れられない記憶が、走馬灯のように思い出されます。

昭和16年12月8日、大東亜戦争に突入し、最初は連戦連勝で、毎日勇ましい軍歌が放送されていましたが、戦いも拡大され、長兄はビルマ（現ミャンマー）方面に出征しました。次男も海軍に入隊し、祖父も祖母も次々と亡くなり、女ばかりになりました。

女学校3年（14歳）の時、学徒動員で、軍需工場^{（注1）}で働く事になりました。機関銃の部品を作っていました。やがて昼夜の2交代制となり、夜勤の時、咳が止まらなくなり、顔は青白く、食欲もなくなりましたので、これは結核だと分かりました。人に言うと嫌われる病気なので、梅干でご飯を押し込む様に食べ、精神力で治しました。又、昼勤の時、夜寝ていると警戒警報^{（注2）}が鳴り、敵機B29が来襲して爆弾を落とし、福岡市内の中心部は火の海となり、真夜中に赤々と燃えている様子が、今でも忘れられません。

昭和19年頃より、南方の前線では苦戦、玉砕^{（注3）}のニュースが入るようになり、国民も節約を求められ、男の人の影も見ることが少なくなりました。軍需工場は、大分の山の中に移りました。しばらくたって終戦となり、福岡へ帰る時、汽車も止まって動かず、長い長い鉄橋を荷物をかついで恐怖と緊張で渡ったことは一生涯忘れません。

いつかビルマに出征していた長兄が帰っ

てくることを待ち続けましたが、届いたのは戦死の公報であり、家族でつらい思いをしました。

戦地から詩を書いて送ってくれたすばらしい優しい兄でした。兄の生涯を思うと、ほとんど兵役ばかりの青春で涙が止まりません。戦争はあってはならないと思います。戦争は両方とも幸せをなくすものです。世界平和を願う指導者の言葉に

平和ほど、尊いものはない。

平和ほど、幸福なものはない。

平和こそ、人類の進むべき根本の第一歩であらねばならないと。

21世紀をになう人達は、この言葉を心の中に刻んで、「平和」の2文字を忘れないで、と祈ります。

(注1) 玉砕……名譽や忠義を重んじて、瀕く死命のこと。

敗戦を見つめて

横澤 昭文

私は9歳で父を、10歳で母を亡くしております。

その後、私は母方の親類に預けられ、私が12歳の春だったと思う。当時満州の新京に住む兄夫婦に引き取られました。私が13歳の夏に義助のいとこだという人に連れられて、奉天という所の徳和紡績株式会社に就職しました。最初は給仕係ということで働くことになり、住居も会社の寮で暮す事になり、それから約3ヵ月ぐらい経った頃に、工場から会計係に部署替えとなりました。私が14歳の夏の頃、工場長から今度は工場の中で働いてくれとの事でした。でも私がまだ14歳ということで満州人の人はずっと年輩の人でしたが、私の補助という事で働く事になりました。

昭和20年8月のある日、工場長より大事な話があるので、各部の責任者は事務所に集合せよとの連絡がありました。お話は、本日天皇陛下のポツダム宣言^(注1)受諾によって戦争終結となり、敗戦の日となりました。その報告を聞き、工場に戻ると、工場は一変しており、ほんの1時間前まで働いていた満州人の人たちを始め、誰一人として全員が働こうとしません。それどころか、突然の悪夢の始まりです。私達の止めるのも聞かず、私達に暴力です。1人、2人と帰宅を始めました。最初に警備室の窓ガラスがたたき割られてしまいました。実はこの会社は軍の指定工場で、軍の衣服を製造していたのです。

日が暮れ始めた頃、道路から叫び声が・・・暴動です。反乱です。ある者は食堂に、あ

る者は工場内に手当たり次第の暴動です。それは悲惨なことでした。次の日からは、お米はもちろん、野菜も手に入らなくなってしまったのです。

仕方なく、農家を1軒1軒尋ね歩きやっと手に入れたお米は、警察に取り上げられてしまうのです。そのため、ご飯は3分の2はサツマ芋ご飯です。ほとんどの人は米粒が数えるほどの雑炊です。それでも良い方です。露店で完らされている1杯15円の雑炊も食べられず、路上で餓死または、もがき苦しむ者が後を絶ちません。

死亡した人は、トラックに集められ学校の校庭に掘った穴に集められ焼かれてしまうのです。あの光景は今でも忘れられません。それよりひどいのは、ソ連兵の婦女暴行です。ある人は子供達の目の前で、ある人は親の前で。

絶対許しません。

あの光景は今でも忘れません。

(注1) ポツダム宣言……1945(昭和20)年7月28日にポツダムにおいて連合国軍が日本に対して発した共同宣言。戦争終結、日本の無条件降伏と戦後の対日処置を定めたもの。軍国主義の排除、戦争犯罪人の処罰、日本の徹底的民主化などを規定。日本は当初これに従わなかったが、8月8日、9日の露露侵攻などにより8月14日受諾。8月15日終戦となった。

私達一家は両親と子供3人、昭和18年に満州国安東省に開拓団として渡りました。戦争中は何事もなかったのですが、敗戦と同時に生活が一変しました。私が12歳の時でした。暴動が起きて家財全部取られ身体一つになりました。のちに日本軍の兵士が来て、軍のトラックで安東の市内まで運んでくれました。この地は朝鮮との国境のため渡ることができず、ここに集まった日本人はすべて足止めをされました。

1年間は間借り生活をしました。初めはソ連軍が入り、次に共産軍が入りました。ソ連軍の時は、若い女性は暴行される事を恐れ、全員頭を丸坊主姿になりました。父は共産軍工場に働き、兄は18歳で共産軍の使役として連れて行かれ、その後病死したとの事です。21歳でした。私は口減らしのために満人の鉄工所に住込みで朝5時から夕方5時まで働きました。

1年経って21年の10月、帰国命令がでて、汽車で奉天に向けて出発したのですが、途中は政府軍との戦闘地帯で線路は寸断され、橋は破壊され、汽車は行かれないので2日間は歩いて便衣隊^(注1)の道案内で政府軍の飛行場までたどり着きました。その間、身体の弱い人や病気の方は、ばたばたと倒れました。連れて行くこともできず、そのまま置き去りにしていくしかなかったのです。

家族の人道は後髪^(注2)を引かれる思いだったと想います。奉天から無蓋車^(注3)で錦州に向かいました。錦州で約2週間、収容所に入りました。食事も粗末なもので、乳呑み子をかかえた母親は乳が出なくて、子供は栄養

失調になり、ほとんどの子供は死んで行きました。

それから引揚げ船の来る「コロ島」に行き、船の中に3日ぐらいいて、日本の佐世保港に着きましたが、船内で伝染病が出たために2週間停泊、父は船の中で病気になり、日本の土を踏んだその日の夜、亡くなりました。47歳でした。

望郷の念に駆られながら異国の地に倒れていった多くの人達の無念を想うと、今でも涙が出てきます。

安東を出発して祖国の土を踏むまでにちょうど1ヵ月の旅でした。ある詩人の著に「戦争ほど残酷なものはない、戦争ほど悲惨なものはない」と言われていますが、最後に、どのような理由があろうとも戦争は二度と起こしてはならないと強く強く思うものであります。

(注1) 便衣隊……平服の姿を敵地に入り、一般市民に混れて襲撃や各種の宣伝をする部隊。日中戦争の時、中国人が組織したものが知られる。

(注2) 無蓋車……無蓋貨車のことか、薄板の無い、鉄製の貨車。石炭や砂利、磁石、木材、車両あるいは工作機械など運んでもよいものを輸送するのに用いる。